

イセエビの資源管理とブランド化

福島県水産事務所 副主査

鈴木 聡

開催日時：令和6年3月1日（金）14：00～15：45

開催場所：福島県いわき市中央台公民館大会議室（いわき市中央台飯野4-5-1）

研修対象者：漁業者、漁業協同組合職員、行政

出席者数：20名

講演名：「千葉県におけるイセエビ漁業と資源管理」

講師：千葉県水産総合研究センター資源研究室 室長 尾崎 真澄 氏

1. はじめに

イセエビは高級水産物として知名度が高く、サイズ規制や禁漁期の設定等による資源管理やブランド化の取組が茨城県以南の太平洋側の各産地で行われている。

近年、福島県ではイセエビの水揚げが増加しているが、歴史的に利用されていた資源ではなかったため、漁業権対象種になっておらず、資源管理の面では海区漁業調整委員会等による公的管理、漁業者による自主的管理の取組が進んでいない。さらに、ブランド化については、一部の仲買業者に留まるのみで、ブランドの推進体制やPR活動は十分に構築されていない。

以上の背景から、水揚げ量上位の千葉県の方を講師としてお招きし、福島県の漁業者等に対してイセエビの資源管理等の先進事例を紹介し、漁業資源としての利用や高付加価値化の啓発を行うことを目的に研修会を実施した。

2. 研修会の概要

本研修会は、令和6年3月1日（金）に福島県

いわき市中央台公民館にて開催された。当日はいわき地区でイセエビを漁獲する漁業者、漁協職員、自治体職員より合計20名の出席があった。研修会では、話題提供として、福島県水産海洋研究センターから「福島県における近年のイセエビ漁獲状況」、いわき市漁業協同組合から「青壮年部による三重県先進地視察結果報告」の2題が発表された。

その後、千葉県水産総合研究センター資源研究室室長尾崎氏から「千葉県におけるイセエビ漁業と資源管理」と題し、イセエビの基本情報や千葉県における漁業、資源管理の取組、調査研究の内容を御講演いただいた。講演の後には、活発な質疑応答や意見交換が行われた。

3. 話題提供

（1）福島県における近年の漁獲状況

- 福島県では3～4年前からイセエビの漁獲量が増加し、直近の2023年では約9.3トン、漁獲金額では約3千万円となっている。地区別では県南部のいわき地区が水揚げの

中心である。

- ・ 月別漁獲量では、春に獲れ始め、夏から秋にかけてが漁獲のピークである。
- ・ 漁獲量と沿岸定置水温には正の相関が確認され、温度が高いほど漁獲量が多い。
- ・ 増加の要因として、近年の海水温の上昇、黒潮続流の北偏が挙げられる。

(2) 青壮年部による三重県先進地視察結果

- ・ 令和5年11月に三重県外湾漁協和具漁港を漁業者4名が訪問し、視察研修を行った。具体的には、イセエビの水揚げ状況の視察等を実施した。
- ・ 三重県においては、3～4年前の黒潮蛇行が始まってから、漁獲量が減少しており、黒潮による幼生の供給が少なくなっていることが要因と考えられる。
- ・ 和具地区では禁漁期や禁漁区の設定、班ごとの水揚げやプール制、一斉出漁、など多岐にわたる資源管理が実施されていた。
- ・ 当該漁協所属の漁業者や漁協職員と意見交換を行い、自主的な資源管理に関するルールづくりや遊漁者対策の重要性を助言いただいた。
- ・ ブランド化の取組として、青壮年部でMSC認証や商標登録の取得に向けて検討したが、元々知名度があることや費用対効果の点から断念したとの事例を紹介いただいた。

4. 講演

(1) イセエビの基本情報

- ・ 産卵から約1年のフィロソーマ幼生、プエルルス幼生といった浮遊期を経て岩礁域に着底するという生活史を送る。
- ・ 千葉県では着底後1年で125 mm程度、2年で165 mm程度、3年で190 mm程度の体長(眼の付け根から尾端まで)になる。
- ・ 千葉県での産卵期は5～9月で、着底後2

年後に成熟を開始する。成熟したメスは1～2か月抱卵する。

(2) 千葉県のイセエビ漁業と資源管理

- ・ 最も用いられる漁法は刺網で、夕方に網を仕掛け、夜間に索餌のため活動するイセエビを漁獲する。
- ・ 全国の漁獲量は1,000～1,400トン前後で推移し、千葉県では2021年に221トンで全国最多だった。
- ・ 千葉県で資源管理は漁業調整規則による公的管理として、体長制限(13 cm以下の採捕禁止)、採捕禁止期間(6/1～7/31)を設定している。
- ・ 千葉県における漁業による自主的管理は小型エビ(体長14 cm以下)の再放流、休漁日の設定、作業時間の制限、網目のサイズ制限、材質、反数制限などに取り組む。
- ・ 体長制限や禁漁期間の設定は全国的に行われており、浮遊幼生の着底がどこで起こるか予見できないため、同じ水準で各県が資源管理を行うことが重要である。
- ・ 刺網では、からまり漁獲と刺し漁獲の2パターンあるが、イセエビの場合は頭と尾を丸めた時のサイズが網目選択性に関係すると考えられる。目合制限については、出現頻度等の調査研究の結果から3.1寸と決定した。

(3) 調査・研究

- ・ 千葉県水産総合研究センターでは市場での頭胸甲長測定と雌の抱卵状況の測定を行っている。
- ・ 調査の結果、千葉県における漁獲物の主体は着底後2年後の群であることがわかった。
- ・ 海藻を模した採集器(コレクター)を使い、プエルルス幼生等の着底量を調査しており、着底量が多いほど2年後漁獲量が多いという相関関係が確認されている。また、幼生

着底量から2年後の漁獲量の推定が可能で、漁獲量予測を旬報トピックスで公開している。

- ・ 主要地区の刺網CPUEから資源評価をしており、2023年の資源水準は高位で、直近5年間の資源動向は増加傾向となっている。
- ・ 現状の水準を維持するためには公的規制の順守と自主的な管理の推進が必要である。
- ・ 全国的な資源管理の取組として、三重県でプール制を導入しているが、多くの人の同意を得るのが難しく、導入には時間がかかる可能性もある。
- ・ 船毎の水揚げデータが取れる場合は、今のうちから収集しておいたほうがよい。CPUE等の情報から資源評価に活用することができる。

(4) ブランド化

- ・ 千葉県では水産物の認知度を高め、広く県内外にアピールするため、「千葉ブランド水産物認定制度」を創設した。
- ・ その中で、「外房イセエビ」として認定しており、規格として、認定対象期間を4～5月、8～12月、大きさを13cm以上と定義付けしている。
- ・ 資源管理に積極的に取り組むとともに、「おんじゅく伊勢えび祭り」、「イセエビ祭り(いすみ市)」など地域をあげて販売促進やPR活動を行っている。



講演の様子

5. 主な質疑と意見交換

(Q)福島県ではイセエビが漁業権対象種になっていないことで一般の方が自由に釣りで獲られてしまい、かなり困っているが、千葉県ではどのような対策をしているか。

(A)昔は漁業権が入っていない地域もあり、同様に一般の方に釣られていた。そういった地域も漁業権を設定し、看板による注意喚起を行った。堤防やテトラポッドは危険なため事故防止の観点からも注意喚起は実施した方がよい。

(Q)採鮑漁業で潜っているときに、小型のイセエビがテトラポッドの隙間にいるのを昔から見ていたが、大きな個体は獲れていなかった、福島県ではこれまで冬を超えられていなかったということか。

(A)親潮が差し込んでくる影響で福島県では、6～7度まで水温が下がるということからおそらく冬を超えられず死滅していたと考えられる。

(Q)これまでの経験から、マダコが多い漁場では刺網を掛けてもイセエビが獲れないことが多い。マダコに食べられるのを避けるため、逃げていたりするのか。

(A)千葉県は大原沖がマダコの主漁場になっており、それより南下することが少なく、イセエビの主漁場と重なっていないため、関係は不明。ただし、マダコが多い年にイセエビが少ないといった関係も調べると面白いかもしれない。

(Q)市場調査はどの程度の頻度で行っているか。
(A)協力をいただける市場で漁期のはじめに1回行っている。

(Q)採集器(コレクター)を用いた着底量調査では1回あたりどのぐらいの量がとれるか。

(A)幼生が獲れないことも多い。試行錯誤しながら現在の場所や手法を確立していった。

6. 謝辞

講師を快くお引き受けいただいた尾崎氏には、大変お忙しい中、イセエビの漁業や資源管理、

ブランド化の取組について幅広く、貴重なご講演をいただきまして厚く御礼申し上げます。

本講演会は、受講した漁業者、漁協職員等にとって、大変有意義な研修会となり、今後のイセエビの資源管理やブランド化の推進に向けた取組に役立つものと考えます。



研修会の様子